

第2話 承久の乱

この変態な武家政治の続くのを 憤りになって、ご英明な後鳥羽上皇が政権の回復を企てられる。兵を召して北條氏を討たせたが、失敗に終り、幕府の勢力は却ってますます強くなる。

ご英明な後鳥羽上皇

しかし武家政治はわが日本の国柄から言って一種の変態ですので、後鳥羽上皇はこれを長く続かせておくべきではないと思われ、予ねてから折があれば政権を朝廷に取り戻そうと考え、諸国から名のあつる刀鍛冶を院の御所に召して刀剣を鍛えさせ、公卿や近臣の者らにも武術を勧められたり、また、北面の武士の外に西面の武士を置いて、しきりに忠義の武士を召されたりした。いうまでもなく、他日に北條氏を打つ準備です。

然るに鎌倉では、たまたま頼朝の子孫は絶えたが、幕府の政治はもとのままであるうえに、執権北條義時は源氏の家来でありながら、その勢いにまかせてわが俣を働き、しばしば後鳥羽上皇のお言葉にも背いた。

執権 北條義時のわが俣

例えば、こういう事がありました。——ある時、上皇が熊野にご参詣なされた時に、鎌倉方の武士で仁科盛遠という者が、その子と共にご行列を拝観していた。上皇はこの親子にお目をつけられて、早速西面の武士にお取立てになったので、親子は喜んで京都に留まった。

ところが、北條義時はこれを聞くと、「鎌倉の武士はすべて幕府の命令に依って動くことになっている。然るにその許しを受けずに、勝手に朝廷に仕えるとは怪しからぬ」と、盛遠の領地を取り上げてしまった。そこで上皇は義時に命じて、その領地を返させようとなされたが、義時はその命令に従わなかった。

また、こういう事もありました。——舞が上手な為に上皇の御所に召されていた亀菊という者に、上皇が攝津の国の二ヶ所の荘園を賜ったところが、その地の地頭は亀菊を侮って、その荘園を亀菊に渡さなかった。それで、上皇は義時にその地頭を罷めさせるように言われたが、義時は、「地頭の職は頼朝が朝廷のお許しを受けて、功劳のある部下の勇士に与えられたもので、大罪を犯さない限り取り上げることはしない事になって居りますから、義時が勝手に罷めさせることは出来ません」といって、この命令にも従わなかった。

後鳥羽上皇のご決心

そうでなくても後鳥羽上皇は義時のわが俣を憤っておられたのに、こうして命令にも従わなかったので、遂に非常にご立腹になり、執権 義時を討って、鎌倉幕府を倒そうと決心なされた。土御門上皇はこの事をお聞きになると、「まだ北條氏を討つ時機ではありませんまい」といってお諫めになったが、後鳥羽上皇はお聞き入れなく、承久3年4月、急に順徳天皇に御位を御子第85代仲恭天皇に譲らせ、

第2話 承久の乱

それから主として順徳上皇を相談相手になされた。

そのために、この時には一時に3人の上皇が居られたので、後鳥羽上皇を本院と申し、土御門上皇を中院、順徳上皇を新院と申し上げた。

こうして承久3年5月、後鳥羽上皇はいよいよ近畿地方の兵をお召しになり、なお院宣を諸国に下して、執権義時の罪を鳴らし、その官位を削って、これを討たせられた。

尼将軍の訓示

しかし、土御門上皇の言われたように、実はまだ時機が早かったのです。関東では、頼朝が死んでからまだ二十年ばかりしか経っていませんでしたので、彼の恩顧を受けた武士はまだ多く残っていましたし、尼将軍の政子はなお達者で、幕府の指図をしていたりするので、時に北條氏を憎むものはあっても幕府を怨むものはなかったのです。それで、義時追討の院宣が下ったのを聞いて大いに驚き、あわてて政子のところに駆けつけて相談した時に、政子が鎌倉の武士を集めて、

「皆、篤と心を落ち着けて聞いてください。これがわたしの最後の言葉です。故の頼朝公が天下を平定して幕府を建てられてから、朝廷に対して勲功こそあれども、罪は何にもありませんのに、今度、何者かの讒言で、鎌倉征伐の院宣が下されました。皆の者は、頼朝公以来の将軍のご恩を忘れは致すまい。そのご恩を報ずる時は今です。どうぞ讒した者らを誅して、鎌倉の将軍家を守ってください。しかし、院宣に従って京方に参りたいものは参るがよい、決して止めはしないから、遠慮なくここで打ち明けて下さい」

と言うと、武士らは皆「決してご恩に背きは致しません。幕府の為に命を捨てても働きます」と答えた。

幕軍の西上

そこで北條義時は大軍を催して、東海、東山、北陸の三道から京都に攻上らせる事にした。その総勢は170,000騎。総大将は義時の嫡子の泰時で、彼は義時の弟の時房と共に100,000騎を率いて東海道を、武田信光、結城朝光らは50,000騎を率いて東山道を進んだ。

義時は鎌倉に留まって全体の指図をすることにしたが、彼は、部下の父や兄が京都に向えばその子や弟を鎌倉に留め、子や弟が出陣すればその父や兄を防備に就かせるというように、肉親の者を二つに分けて、幕府に背かせないように努めた。自分が朝敵になったのですから、部下の武士らがいつ叛いて官軍にならないものでもないと恐れたのです。

北條泰時

しかし、総大将の北條泰時は、父の義時と違って心得の良い人でしたから、軍議の定まる前に、父に向って、「上皇が鎌倉征伐を思い立ちになったに就いては、何かの仔細のある事でしょうから、父上は先づ京都に上って、篤とその仔細を承り、上皇のお怒りの解けるようにお申開きをなさるべきであります。臣下の分を忘れて、兵を京都に差向けるという事はよろしくありません」と言って、諫めた。

第2話 承久の乱

しかし^{よしとき}義時は、「京都に兵を差し向けるのは、上皇に敵対するためではない。ただ、おそばに在って^あ悪い事をお勧め申したりする悪者らを懲らすためである」といって聴かなかったので、軍の評議が定まる^{ひょうぎ さだ}と、^{やすとき}泰時はよんどころなく父の命のままに出発することになったのでした。

ところが、^{やすとき}泰時は軍勢を率いて出発した翌日、唯一人で、馬に鞭打って鎌倉に還って来た。^{よしとき}義時は^{おどろ}驚いて、「どうしたのか?」と尋ねると、^{やすとき}泰時は、「軍の仕方や掟はお指図を受けたからよろしいが、^{ほうれん}万一鳳輦(訳注:天皇の乗り物)を先立て、^{さきだ}錦の御旗をあげて、^{せいぼつ}鎌倉勢をご征伐なさるような場合には、^{いた}いかが致しましょうか? この一事が心配になりましたので、お考えを承^{かえ}るために還って来ました」と言った。

^{よしとき}義時は暫く考えていたが、「うむ、よく聞きに来てくれた。まさに君の御輿に向って弓を引く事はできない。御親征の場合には^{かぶと}冑を脱ぎ、^{つる}弓の弦を切って、^み身をまかせ奉^{たてまつ}れ。しかし、君は都にお^{さき}わして、^{ぐんびよう}ただ軍兵を差し向けられるだけならば、^{いのち}命を捨てて、^{たたか}1000人が1人になるまでも戦えよ」と^{おもおも}重々しく言った。

^{やすとき}泰時はこれを聞いて、更に決心の臍を固めて出発した。これを見ても、いかに^{よしとき}義時や^{やすとき}泰時らが今^{おそ}度の上皇の思い立ちを恐れ奉^{たてまつ}ったかが分かります。

官軍の惨敗

幕府の大軍が3道から進んで来るとい事が分かつと、朝廷でも、^{かね}予て用意なされていたことであるので、直ぐに兵を美濃、尾張、及び北陸の方面に出してこれを防がせられたが、何分にも^{ぐんぜい}軍勢が少ない上に、^{さしづ}総大将となって全体の指図をするほどの人物がいなかったので、^{ばんぐん}幕軍に出会うと^{たちま}忽ち敗れて、3方共にあわてて京都に引き返した。この時、かの^{にしなもりとう}仁科盛遠は北陸道へ向っていたが、^{えつちゆう}越中で^{はなばな}華々しく^{せんし}戦死しました。

幕府の^{ぐんぜい}軍勢は^{れんせんれんしょう}連戦連勝で進んで来る。^{かんぐん}官軍は^{うじ}宇治、^{せた}勢多(瀬田)、^{よど}淀の各所で最後の^{ぼうぎよ}防御をすることにした。^{おり}折からの大雨で、^{みづかさ}水嵩の増した^ま宇治川は、^{ものすご}物凄い勢いで、^{いきお}濁流が^{だくりゆう}漲っていた。^{官軍}官軍はこれを力に、^{はしいた}宇治、^{ふせ}勢多の橋板を引いてよく防ぎ戦ったが、^{やすとき}宇治に向って来た^さ泰時の軍の^さ佐々木^{のぶつな}信綱という一かの^{げんべい}源平の^{たたか}戦いの時に、^{かちわらかげすえ}梶原景季と^{せんちん}先陣を争った^さ佐々木^{たかつな}高綱の甥に当たる一者が、その^{だくりゆう}濁流の中へ^{まっさき}真先に^{のりい}馬を乗入れて^{せんちん}先陣したのを始めに、^{はじ}泰時の子の^{やすとき}時氏らが^{ときうち}続々と^{かわ}河を渡って来ると、一時は^く食い止められそうに見えた^{けいせい}形勢が一変して、^{いっぺん}官軍は^{そうくず}総崩れとなって^{たいきやく}退却した。^{あと}鎌倉勢はその跡を追^おって京都に入^{はい}って来た。

これと^{ほん}殆ど同時に、^{どうじ}勢多でも、^淀淀でも、^{官軍}官軍は皆負けた、^{鎌倉勢}鎌倉勢はその方面からもぞくぞく入って来た。

後鳥羽上皇のご失望

^{ことば}後鳥羽上皇は負けて帰ってきた武士らからその事情をお聞きになると、^{しつぼう}非常に失望されたが、今はこれまでと思われ、^{いそ}急いで^{いんぜん}院宣を使い^{つか}に持たせて^{やすとき}北條泰時に^{つた}伝えさせられた。そのお使いが^{ろくじょうがわら}六条河原ま

第2話 承久の乱

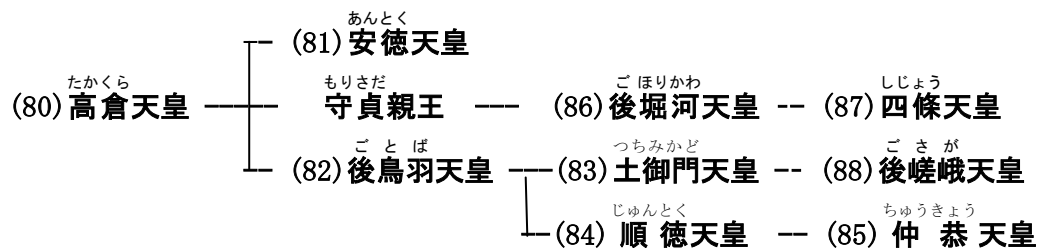
で行くと、泰時は軍勢を率いて進んで来たが、勅使と聞くと馬から下りて、謹んでその仰せを承った。

上皇は、この度の事は自分の思いついた事ではなくて、一部の公卿の考えから出た事である旨を仰せ出され、且つ、義時追討の院宣を取り消し、その官位を復すから、良きように取り計らえと告げられたのでした。実に承久3年6月15日の事で、朝廷で兵をお集めになってから僅かに1ヶ月の後です。

さて泰時は、事の次第を鎌倉に知らせて、戦後の処分を如何にすべきかは、すべて父執権義時の命を待つことにした。その命令は6月の末に来た。

戦後の処分

義時は先づ今度の謀のご相談に與かった公卿及び武士らを或いは殺し、或いは流した上に、恐らくも後鳥羽上皇を隠岐に、順徳上皇を佐渡にお遷し、仲恭天皇を廃して、後鳥羽上皇の御兄守貞親王の御子茂仁王を立てて、第86代後堀河天皇となし奉った。仲恭天皇は時に御年4才のご幼少で、もとより何事もご承知ではなかったのですが、順徳上皇の御子であるために廃されたのです。在位僅かに70余日でした。土御門上皇は後鳥羽上皇をお諫めなさったほどで、初めから今度の企てには與られなかったので、義時もそのままにお置きしていたが、御父の後鳥羽上皇や御弟の順徳上皇が遠い島に遷されるのに、独り安閑として京都に留まっているのは本意ではないと鎌倉に仰せられて、土佐(高知県)に遷された。しかし、その地は余りに辺鄙なので、執権北條義時は、せめて少しでも近い所にと申し上げて、間もなく阿波(徳島県)にお遷し申した。



執権北條義時の無道

この乱は承久3年の出来事ですので、世に承久の乱といっている。執権北條義時が臣下の分を忘れて、みだりに京都へ大軍を差し向けたばかりでなく、恐らくも天皇の廃立を行い、3上皇を流し奉ったのは、誠に驚くべき無道ですが、彼とて、子の泰時が鎌倉に引き返した時の問答を見れば、皇室を尊敬すべきことは十分に心得ていたのです。それなのに、どうしてこういう不忠不臣の暴虐を敢てしたのでしょうか？

按いますに、彼は頼朝以来の武家政治を正当なものと思いあやまっていた上に、皇室のご威光を恐れれば恐れ奉るほど、上皇方をそのまま京都にお置きして、いつまた兵をお集めになって、幕府を倒そうとなさるかも知れないと、それを恐れたのでしょうか。今度こそ幸いにして鎌倉方が勝ったとはいえ、再び義時追討の院宣を下されるようなことがあって、朝廷方に参る忠義の武士が若しも多くなると、迎

第2話 承久の乱

も今度のような勝利は覚束ないと、それを恐れたのでもあったでしょう。

それはともかく、^{おぼつか}義時の不忠不臣は、実に平清盛にも遥かにすぎているが、平重盛にも比較される^{やすとき}泰時^{いさ}までが、どこまでも父を諫めた^{しげもり}重盛^{ちが}と違い、何事も父の命令を守って父の無道を成遂げさせたのは残念であります。

六波羅探題

しかし、^{よしとき}義時がいかに朝廷を恐れていたかは、この乱の後に、京都の^{ろくはら やくしょ もう}六波羅に役所を設けて、^{ろくはら やくしょ もう}六波羅探題^{たんたい}という役を置いた事でも分かります。六波羅探題の役目は、主として^{やくめ}近畿及び^{きんき さいごく}西国の政治を行うことでしたが、それと同時に、常に朝廷の様子を見守って、何か幕府にとって不利益な事でも起こりそうな時には、直ぐにこれを鎌倉に知らせる役目をも持っていた。即ち朝廷に対する^{すなわ}目付け役ともいべきもので、幕府の^{しっけん つ おも}執権に次ぐ重い役目でした。これは^{じょうきゅう らん こ}承久の乱に懲りた^{よしとき}義時が、再びああいふ事件を起こさせない為にと、^{ため}いわば^{よぼう お}予防を置いたのです。

それで、これから後の京都は全く北條氏の^{かんし もと あ}監視の下に在ることとなり、北條氏の^{けんりょく}権力がますます強くなるにつれて、皇室のご威光は次第に^{しだい おとろ}衰えました。六波羅探題の^{ていじん}定員は2人で、最初にこの役に就いたのは^{やすとき}泰時と^{よしとき}義時の弟の時房^{ときふさ}とでしたが、この後もこの^{しょく}職には代々北條氏の一族が就くことになっていった。2人は六波羅の北と南とに^{やしき かま}邸を構えていたので、世間では彼らを^{りょう}両六波羅殿とも、北殿、南殿とも言った。

執権 北條義時の最後

^{よしとき}執権 義時はこの乱の後3年目に62才で死んだ。病んで寝ている時に^や近臣に^ね刺し殺されたとも伝えられるが、その点のはっきりとは分かっていない。ただ^{ひさ}久しく^{びょうき}病気でぶらぶらしているうちに、ある日、俄かに非常に^{くすり}苦しき^{きとう}だして、^{てあ}薬も、^{なん}祈祷も、^{かい}あらゆる手当ても何の^{きよもり}甲斐もなく、^{さいご}ちょうど清盛の最後と同じように、^{もんし}苦しき^{たし}苦しんで悶死したことだけは確かです。おそらくは無道の限りを^{むどう}尽した^{かぎ}天罰^{つく}が、ついにその身に^{むく}報いて来たのでしょう。

^{よしとき}義時の死んだ次の年に、^{あま}尼将軍と呼ばれた姉の^{まさこ}政子も死んだ。年は69才でした。けれども、^{よしとき}義時の次には子の^{やすとき}泰時が^{しっけん}執権となって、^{じんせい}あまねく^{ほどこ}仁政を^{てんか}施したので、天下はよく^{おさ}治まって幕府の^{いきお}勢いはますます盛んでした。先に京都から下って来ていた^{さか}頼経^{さき}が、9才で^{よりつね}鎌倉幕府の将軍に^{にん}任ぜられたのは、^{まさこ}政子の^な亡くなった^{よくねん}翌年の事でした。

(第2話 承久の乱 終わり。 次は前頁に戻り、 第3話 遷幸の三上皇 へ